

1. (1) 転換とは何かの問いが（高校生より）立てられた。それに対して、転換とはまず自分を立てて生きる生き方から生かされて生きる生き方への転換である、とされ以下のような議論が展開された。人間は自分を立てて生きて行くしかできない。しかし例えば驚く、頷くなどは自分の意志ではできない。人間は自分の思いを一步も出ることができないが故に逆にそうした思いを破るものに触れることができる。「生かされて生きる」ということもそうした気付きである。これを「生かされて生きよう」と思えば、自分を立てることになるが、人間はこうしたあり方をやめられない。しかしこの「やめられない」と頷く所に生かされて生きる在り方が現成している。

(2) 哲学的問いは「西田は『絶対的他者』を形而上学的な実体として立てているか」であった。しかし「立て」てしまえば、それを立てる自己が立ってしまうから、そうなるそれはもはや「絶対的他者」ではないことになる。故に「絶対的他者」を形而上学的実体として立てることは不可能である、とされた。

## 2. テキスト

「九 意志の根柢に於ける無限の可能性。自由の因果。思惟に於ける時の潜在性」の始めから、74 頁 3 行目まで。

## 3. テキスト要約

前節「八」において、物理的世界と精神的世界が共に意志の自覚の立場から説明され、この精神的世界が理念的世界、つまり言語の世界とされた。これを受けて「九」ではまず意志の自由が論じられる。「意志は意志自身の根柢に於いて、力の世界を離れ、価値の体系にも叛き得る自由を有って居る」と述べられる。意志の根柢とは意志が窮する所、直観（明白）の成立する所であり、「力の世界」、「価値の体系」とはもちろん物理的世界と精神的世界のことである。では何故意志が自由を有っていると言い得るのか。

「肯定判断の裏面には否定判断を含んで居る」。これは言語の世界（理念的世界）において成立することである。西田はここから議論を始める。「或物が或物であるであるということは、その物でないものではないということの意味して居る、而して斯くの如き判断の成り立つには、その根柢に両者を含むものがなければならぬ」。判断から出発し、〈AでもなくBでもなく、AでもBでもあるもの〉を判断の根柢に要請するというやり方である。西田は「或物」（「或色」が例に挙がっている）と「その物でないもの」の統一から出発し、次いで意志を問題にする。すなわち意志は「無限なる作用の統一」として「作用」を成立せしめるものであるが、それは「働くもの」と「働かざるもの」の統一でなければならぬとされる。「働くもの」と「働かざるもの」の統一は「動」と「静」、「肯定」と「否定」の統一、「見るもの」と「見ざるもの」の統一に重ね合わせられていく。この場合「働くものを見る意志は、働くと共に働かざるものでなければならぬ」とあるように、「見るもの」が「働かざるもの」とされていることに注意が必要である。要するに意志は「働くもの」であると共に「見るもの」だということである。ここまでは総論である。

次に「見る」ということが差当り「知る」という側面において問題とされる。一方から見れば「知る」も「働き」であり、その基に「意志」があるとも考えることができるが、他方から見れば「知る」はこの「意志」をも「反省」によって知的対象とすることができる。しかし「これが自己の意志である」ということは単なる「知的立場」からは出て来ない、と西田は考える。単なる「知的立場」に立つならば「自分の意志によって手が動いたということも、外物が動いたということも、同様に客観的現象でなければならぬ」からである。

この辺りは『善の研究』と正反対の主張になっていて大変興味深い。第 1 編第 3 章第 4 段落（新文庫版 頁）には以下の叙述が見られる。

我々は常に過去の運動表象の喚起に由りて自由に身体を動かしようと信じている。しかし我々の身体

も物体である、この点より見ては他の物体と変わりはない。視覚にて外物の変化を知るのも、筋覚にて自己の身体の運動を感じずるのも同一である、外界と言えども両者とも外界である。然るに何故に他物とは違って、自己の身体だけは自己が自由に支配することができると思えるのであろうか。我々は普通に運動表象をば、一方において我々の心像であると共に一方において外界の運動を起す原因となると考えているが、純粹経験の立脚地より見れば、運動表象に由りて身体の運動を起すというも、或る予期的運動表象にすぐに運動感覚を伴うというに過ぎない、この点においては全ての予期せられた外界の変化が実現せられるのと同一である。

ここ（『善の研究』）では「純粹経験の立脚地」より見れば「自分の意志によって手が動いたということも、外物が動いたということも」同一の現象だと言っている。これに対し「物理現象の背後にあるもの」では、それはおかしいから「意志の現象を見るには働く自己の自覚より出立せねばならぬ」と言う。自覚から出立しなければ手が動いたということ自分の意志実現と見ることができないということである。『善の研究』ではそれで一向に構わない、むしろ自分の身体を自由に支配できると考える方がおかしいとされていた。「少しく複雑なるものは予期的表象に従うことはできぬ、この場合に於いては意志の作用は著しく知識の作用に近づいてくるのである」と言う。例えばピアノで難しいパッセージなどがなかなか引けない場合などを想像すればいいだろう。しかし「物理現象の背後にあるもの」ではそれでも「我々が手を動かした時、手という物体が動いたのではなく、私が動かしたのであるという意識」がある以上、それが「何處から起こって来るか」（以上 4,73）に答えられなければならない、しかし「内的知覚の立場」さらにはそれを反省した「純なる知的立場」ではそれを説明することができない、それを説明するためには「自覚」の方から考えなければならない、そのように考えるのである。

西田はさらに次のように続ける。

意志も感情も内的知覚という如き立場から対象化することができると思えるのは、その場合、内的知覚と考えられるものが、働く自己の自覚なるが故である。（4, 74）

「意志も感情も内的知覚という如き立場から対象化できる」とは前頁の「我々は純なる知的立場に於いて、実在界を離れ得ると考えることもできる。すべて我々の心眼に現れ来るものの底に、静に動かざる知的立場があると云うことができる（4, 73）」ということであろう。そうであるとするならばその立場は、自分の意志や感情だけでなく、外物の変化も含めた一切の実在界を反省の対象とする立場である。そうした反省が可能となるのは「内的知覚と考えられるものが、働く自己の自覚」だから、と言っていることになる。「純粹経験の立場」では必ずしも明確でなかった自覚の立場から、「純粹経験の立場」が自覚を出立点とする「内的知覚の立場」として捉え直されていることが分かる。

さてこれまでの議論を振り返っておこう。意志は「働くもの」と「働かざるもの」との統一であり、この「働かざるもの」とは「働くものを見る」意志であったが、この「見る」ないし「知る」が差当り「知的立場」における反省とされた。この場合「働くもの」と一体となったものが「内的知覚」であり、それを反省することが「見ること」であると考えられる。しかしこの「見る」ことの成立根拠が「自覚」とされたのである。この「反省」を支える「自覚」はもはや反省的な見ることではないだろう。ではどう考えるか。「働くこと」を「見ること」としての内的知覚の反省はどこまで行っても「働くこと」自身を見ない。こうした反省の窮する所に成立する「直観」によって、「自覚」が成立し、それによって反省が逆に成立する、このように考えるべきだろう。そのことは続く箇所ですぐに明らかとなる。